

1人1台時代の授業参観ガイド

— 私たちは ICT を利活用した学習の何を「参観」したらよいか

芳賀高洋 (はが・たかひろ)

岐阜聖徳学園大学教育学部准教授

1. はじめに

幼小中高校では教育活動（授業など）を、保護者や教育関係者、あるいはマスコミに公開することがあります。近年では、タブレット端末など ICT 機器を児童生徒全員に配布し、それを活用した「最先端」をうたった公開授業も盛んです。

タブレット端末など ICT 機器を利活用した授業は、最近の学校教育をご存じない保護者や一般の方、あるいはマスコミから見ると、「自分が子どものときに受けた授業と全然違う」と驚き、みだ目の派手さから批判を忘れて授業を参観することもあるでしょう。

一方で、ICT を利活用した授業は、よく批判も受けます。たとえば、「先生が話しているのに児童がタブレットの画面に夢中になっていた」、「先生の指示と違うことを勝手にやっている」、「タブレットを使っただけで、わかった気になっている（教えた気になっている）」などです。しかし、こうした批判も、1人1台時代の授業参観としては、すこしのはずれであるように私は思います。

では、先生、保護者、マスコミ一般は、1人1台時代の授業参観で、何を考え、何をみればよいでしょうか。

2. 「使いこなす」とは何かを考えながら参観する

— 道具、環境から「能力」へ

1人1台時代の授業参観では、先生が ICT を子どもにどのように使わせているかをみるのではなく、子どもがどのようにうまく使いこなしているかをみるとよ



芳賀高洋

岐阜聖徳学園大学教育学部准教授。1993年より中学校や高等学校等の講師として「インターネットの教育利用」を実践・研究。大学講師、IT系企業社員、特別支援学校教諭、中学校教諭を経て2012年より現職。教職（小中学校の教員養成）の講義・実習を担当。現在の専門は教育領域に関わる情報倫理学で、倫理学・応用哲学者らとの共同研究が多い。最近は学習資源の著作権処理問題に集中的に取り組んでいる。Facebookコミュニティ「ICT教員論からの脱却（脱ICT教員論）」メンバー。

いでしょう。

よく、先生がタブレットなどのICTを使う場面を指定して、子どもがその指示通りに使う授業が行われます。そうした授業では、「ICTは道具であるので必要とときだけ使う」、「ICTを使わないとできないような活動をさせる」といったポリシーを先生が考え、授業をデザインしていることでしょう。そして、先生の思惑通りに子どもがICTを利活用する姿をみて、「子どもがICTを使いこなして学習している」と評価します。一般的には、このような一見「よく練られたICT利活用」の授業が良い評価を受けます。

しかし、こうした授業は、子どもがICTを使いこなしていると「錯覚」しやすい面があります。

たしかに、「道具」は特定の目的を持ちます。たとえば、ノコギリの目的は、「木材や金属を切断するための道具」というのが「正解」です。ネジ止めや釘打ちにノコギリを使うのは明確に「間違い」です。

しかし、ICTは、使い方の「正解」も「間違い」も、あまりはっきりしません。使い方だけで様々な意味をもちます。情報を受信したり発信したり、コミュニケーションしたり、書いたり、描いたり、計算したり、ソフトウェアによっていろいろな使い方ができる「万能性」があるからです。ですから、学習において先生がICTを使う場面を指示し、あるいは固定し、その時だけICTを使わせるという学習は、明確に「間違い」ではないものの、「正解」でもありません。

では、1人1台時代の学びにおけるICT利活用の「正解」とは何なのでしょう？

私は、それは、「先生が」ではなく、「子どもが」自ら使用する場面を決めることができる利活用だと考えます。使う、使わないは、子どもが自らトレード・オフで判断し、選択する。ICTを活用したほうがよいと思った時に活用し、活用しないほうがよいと思った時には活用しないようになれば、本当の意味で「使いこ

なしている」とみてよいでしょう。すなわち、「必要などきだけ使う」、「ICTを使わないとできない」は、先生が決めるのではなく、子どもが判断し、決められる力を身につけることが、ICTを活用した学習の「正解」ではないでしょうか。

そう考えると、ICTは「ただの道具」や「環境」ではなく、子どもの「能力」の一部であるという見方をすることができます。1人1台時代の授業参観では、ICTによって子どもが「能力」を獲得しているか、あるいは、能力を拡大・拡張しているかをみるとよいでしょう。

3. 1人1台時代の「賢さ」とは何かを思案しながら参観する

1人1台時代の授業参観では、先生のパフォーマンスをみるよりも、子どものパフォーマンスをみるとよいでしょう。参観者は、「先生の授業」を観察し、良い悪いと「評価」を下すよりも、「子どもの言動（学び）」を観察し、なぜ子どもがそのような言動をするのか、思いをめぐらせることが大切です。

ただし、参観者がみるべき「子どもの言動（学び）」とは、先生の指示にしたがって学習しているとか、子どもが挙手をして先生に指名されて答えたり、発表したりすることとは限りません。そうした子どもの言動（学び）の多くは、結局は、先生のパフォーマンスでしかないからです。

一般的な一斉授業では、挙手をして先生に指名された子どもの答えは、たいてい、先生（大人）が答えてほしいと期待し、あらかじめ用意しておく「仕組まれた正解」であることが多いのです。ですから、優秀な子どもは、先生が期待する「仕組まれた正解」を先まわりして探そうとします。

こうした一斉授業は、極端に言うところ、「先生が期待する正解を探す活動」が「学びである」というスタンスで授業がつけられています。通常は、はりつめた緊張状態のなかで（よそみしたり、目を閉じたり、鉛筆をくるくる回したりすると注意される）、学習が先生の主導でスケジューリングされ、進行します。

こうした授業はよく「先生が主役の劇場型授業」などと言われますが、私なりに例えるならば、「大人があらかじめ宝物をわかりやすい場所に仕込んでおいた宝探し」のような授業です。よくしつけられた「空気を読める」優秀な子どもであれば、大人が仕込んだ宝物を見つける過程で、宝物を仕込んだ大人の顔色をうかがったうえで「宝物のありかにとどりつくための正解の思考」もつけ加えて答えるかもしれません。そういう子どもに対して、先生も保護者も「賢い」、「理論

的」と感動します。子どもの「正解」の表明によって「子どもは理解した」、「よく学んだ」、「成長した」と安心し、次の学習にすすみます。

しかし、賢く理論的なのは、答えた子どもではなく、むしろ、そう答えるように仕向け、正解を用意した先生（大人）ではないでしょうか。こうした授業で一番学んでいるのは、じつは子どもではなく、先生のほうかもしれません。こうした授業は、先生のパフォーマンスが目立ち、授業参観した人は「この先生は素晴らしい」と注目してしまいがちです。そして、「この先生に学べばうちの子も学力が身につく」と、勘違いしてしまうかもしれません。

一方で、1人1台のICTを子どもが持つ学習では、本来的には、その場はかなりリラックスした場となるはずですが。そして、子どもから発せられる「はなし」は、必ずしも「正解」ではありません。特定の方向の流れも、まとまりもないかもしれません。聞こえてくる子どもの「はなし」も「正解」ではないことがあるでしょう。しかしながら、不規則な発言、間違っただけの言い、つぶやき、ひとりごと、子どもどうしの対話（おしゃべり）にこそ注目すべきものがあります。

一斉授業と比較すると、子どもが自由にICTを利用して得られる知識や情報は、「正解」であるかどうか、大人でも判断しにくいものとなるかもしれません。なぜならば、ICTには先生ほど心理的に信用がありません。「正解」を探そうと無駄な情報がたくさんみつかります。ICTは意図的に嘘をついたりはしません。しかし、偽情報など質の善し悪しにかかわらず雑多な情報を、機械的に、平等に提供します。そのため、情報を受けとった側は、いろいろな情報を加味し、考え、判断する必要があります。

また、ICTには良心も悪意もありません。そのため、子どもは、先生の顔色やうかがったり、空気を読んだりする必要はなく、純粹に、得られた情報が正しいかどうかを判断しなければなりません。そして、それらを判断するために、ひとりごとをつぶやいたり、他の子どもと話してみたり、デジタルペンをくるくる回しながら目をつぶって考えてみたり、もちろん、先生に質問してみたり、あるいは、違うアプリを起動して考えをまとめたり、別の情報を得てみたりするのは、いわば「必然」です。

1人1台時代の授業参観では、この「必然」に、先生も保護者も注目し、思いをめぐらせたうえで、子どもの学びを評価する必要があるでしょう。なぜならば、この「必然」こそが、1人1台時代の子どもの「学び」であり、「賢さ」だからです。

4. 実技教科の学習のつもりで参観する

1人1台時代の授業参観では、どのような教科学習でも、実技教科の学習をみるつもりで授業参観するとよいでしょう。

実技教科では、多くの場合、座学で系統的な知識や情報を先生が提示し、学習者がそれをノートに書き写して、大量の知識を記憶するような学習はあまり行われません。子どもが何かを作ったり、表現したり、実験したりする活動を通じて、その活動に必要な道具や身体の活用方法、科学的知識、技能を、頭や身体を使って試行錯誤し、失敗したりしながら学んでいき、結果として「教養が身につく」、「賢くなる」ことをねらいます。ですから、実技教科の学習を参観するときには、子どもがどんな問題に直面し、問題に対してどう対応して解決をはかっているのかをみることになります。作品等の完成にむかって試行錯誤する子どもの姿をみるのです。

1人1台時代の授業参観では、教科にかかわらず、子どものそんな学びの姿を目にしたいものです。子どもが直面する課題に、ICTをどう有効に活用してその問題の解決をはかっているのか、あるいは、うまく使えなかった、解決ができなかったかをみるとよいでしょう。

すこし余談めいた話になりますが、このような学習方法を「問題解決学習」、あるいは、「プロジェクト法」などと言います。また、その根底には「児童中心主義」と呼ばれる考え方もあります。一方、これらの教育・学習方法と対立する考え方は、先生主導の詰め込み主義、系統学習、オペレーション法と言います。

日本でも戦後から1960年代くらいまでは児童中心主義の問題解決学習が盛んだったと言います。しかし、高度経済成長時代に、「学力の低下」が問題となって、「行き過ぎた児童中心主義」とか、「はいまわる経験主義」などと批判されました。とくに国語、算数、社会、英語といった座学中心の学習は、受験戦争が激化し、時間がかかる自主的な学びや主体的な個別の学びよりも、ある程度強制的に知識を効率よく学ぶことができる系統学習にシフトしていきました。

一方で、問題解決学習は非効率とみなされました。ただ動き回って活動しているだけで、それは学んでいるとは言えないという価値観です。現在も実技教科では、何かを作っていくなかで問題に対応し、必要な知識や技能を身につけていく学習が残っていますが、授業時数は大幅に削減されています。

ICTは、系統学習よりは、おそらく、問題解決学習や何かを作る創造ベースの

学習のほうがより効果を発揮する可能性があります。系統学習に無理に ICT を利用しようとする、無理がたたって、かえって効率的でなかったりするかもしれません。ですから、無理に ICT を「使わせて」いるか、いないかは、授業参観の一つのポイントにもなるでしょう。

5. 学力をどうみて、考え、捉えるか

学習における ICT 利活用の大きな目標として、「学力の向上」がよくあげられます。しかし、この「学力」をどうみるか、どう考えるかは難しい問題です。ICT を活用したからといって、学力試験の点数が向上する確実性はありません。したがって、ICT を利活用した授業を盛んに行ったのに、学力試験の平均点数は変わらないじゃないか、と批判を受ける可能性があります。

しかし、学力試験で測れる能力は学力の一つの要素でしかありません。学習指導要領に示される学校教育の目標は、「生きる力」の育成です。「生きる力」には、ICT を有効に学習、生活、仕事に利活用することも含まれるという考え方もあれば、そうではないという解釈もあります。ICT を利活用した授業を参観する人は、ぜひ、これからの「生きる力」とは何なのかを自問しながらご覧になることをおすすめします。

6. まとめ

1人1台時代の授業参観のポイントとして、次の4点をあげました。

- ①先生が ICT を子どもにどのように使わせているかをみるのではなく、子どもがどのようにうまく使いこなしているかをみる。ICT の使いどころを子どもが判断し、決める力が身につくような学びであるかをみる。ICT がただの道具や環境ではなく、子どもの「能力」になりえているかをみる。
- ②1人1台時代の「賢さ」を考え、問題解決型学習の「必然」的な行動を思索しながら参観する。「先生の授業」を観察し、良い悪いと「評価」を下すよりも、「子どもの言動（学び）」を観察して思いをめぐらせる。

③どのような教科学習でも，実技教科の学習をみるつもりで授業参観する．
系統学習や一斉授業に ICT を無理に使わせているか，いないかをみる．

④これからの「生きる力」とは何なのかを自問しながら参観する．

いかがでしょうか．タイトルは「授業参観」としましたが，学校の先生が主導する「授業」の参観ではなく，子どもの「学び」そのものの参観をおすすめしていることがもうおわかりでしょう．

みなさんが 1 人 1 台時代の教育を考える際の一助となることを願います．